

令和 7 年度

川越町小規模保育事業者等巡回指導事業

報告書



川越町子ども家庭課

令和8年6月30日

目次

第1章 事業の概要	4
第2章 事業開始にあたっての協議	3
第3章 各園から出された課題と研修目標	7
第4章 第1回巡回指導記録:もりのくに褒育園川越	12
第5章 第2回巡回指導記録:川越幼稚園	16
第6章 第3回巡回指導記録:ひばりこども園	21
第7章 第4回巡回指導記録:南部保育所	26
第8章 第5回巡回指導記録:北部保育所	29
第9章 第6回巡回指導記録:中部保育所・役場会議室	33
第10章 巡回指導を通して共有された主な論点	36
第11章 各園の振り返り	42
第12章 総評	45
第13章 今後の方向性	49
資料編	53
あとがき	55

第 1 章 事業の概要

1. 事業の名称

令和 7 年度 川越町小規模保育事業者等巡回指導事業

2. 事業の目的

本事業は、川越町が認可を行う町内の小規模保育事業者などに巡回アドバイザーを派遣し、助言・指導などを行うことにより、保育・幼児教育の質の向上を図ることを目的として実施された。

また、巡回アドバイザーによる指導時に、町内の公立及び私立の保育士、幼稚園教諭などが同行し、公開保育や意見交換を行うことで、参加者自身の学びや振り返りを促し、町全体の保育の質向上につなげることを目指した。

本事業は、単に外部講師から一方向的に指導を受ける形式ではなく、各園が相互に学び合い、園ごとの特色や課題を共有しながら、川越町全体として保育・幼児教育を支える関係性を形成していくことを重視した点に特徴がある。

3. 支援対象

(1)巡回指導対象

川越町内の小規模保育事業者、保育所、幼稚園、認定こども園など

(2)同行指導対象

町内の認可保育所、幼稚園、認定こども園などに勤務する保育士、幼稚園教諭などのうち、川越町が指名する者

4. 業務内容

本事業では、主に以下の内容について巡回指導及び意見交換を実施した。

(1)小規模保育事業者などへの巡回指導

- ・小規模保育事業者などの業務全般に関する助言又は指導
- ・保護者対応における個別事例への助言又は指導
- ・障害のある子どもや特に配慮を必要とする子どもの支援に関する助言又は指導
- ・その他、町が必要と認める事項

(2)同行指導

- ・巡回指導時に同行する保育士などへの指導方法に関する助言
- ・公開保育や保育実践に関する振り返り
- ・園間の意見交換及び情報共有
- ・その他、町が必要と認める事項

5. 事業実施の背景

川越町では、小規模保育事業所の設置や、川越幼稚園の認定こども園化などを背景として、保育・幼児教育を取り巻く環境が大きく変化している。

特に、小規模保育事業所については、三重県認可の保育所とは異なり、町が認可主体となるため、一定の保育の質を担保する責任が川越町に求められている。

また、未満児保育の増加に伴い、0 歳児保育や発達支援、保護者支援などへの対応が重要性を増している。未満児は乳幼児突然死症候群(SIDS)などへの配慮も必要であり、保育士一人ひとりの専門性や判断力が求められる状況にある。

さらに、近年は以下のような課題も各園から共有された。

- ・保育士不足
- ・若手職員育成
- ・発達支援
- ・保護者対応
- ・職員間コミュニケーション
- ・園内研修
- ・ICT 活用
- ・保育士の働き方
- ・安全管理
- ・認定こども園化への対応
- ・外国ルーツ家庭への支援

こうした課題は、一園のみで解決することが難しく、町内の各園が相互に学び合い、情報共有しながら対応していく必要性が高まっていた。

6. 本事業の特徴

本事業の大きな特徴は、「相互に学び合う巡回型研修」として実施された点にある。

従来の巡回指導は、外部講師が各園を訪問し、助言・指導を行う形式が中心であった。しかし本事業では、各園の主任層などが他園を実際に訪問し、公開保育や環境構成、職員間の関わり、子どもの姿などを直接見ることで、自園の実践を振り返る契機としていくことが重視された。

実際の巡回では、

- ・子どもの主体性を重視した保育
- ・異年齢保育
- ・発達支援
- ・保護者対応
- ・園内研修
- ・ICT 活用
- ・安全管理
- ・職員間連携
- ・働き方改善

などについて、率直な意見交換が行われた。

また、各園の実践を「優劣」で捉えるのではなく、「それぞれの園がどのような理念や条件のもとで保育を行っているか」を理解する姿勢が共有されたことも、本事業の特徴であった。

7. 本事業の到達目標

本事業では、単年度で統一的な成果物を作成することのみを目的とするのではなく、以下のような中長期的な視点を重視した。

- ・各園の相互理解
- ・園間ネットワーク形成
- ・公開保育を通した学び合い
- ・保育士同士の関係形成
- ・若手職員育成
- ・園内研修体制の強化
- ・子どもの育ちを町全体で支える視点の共有
- ・認定こども園化などを見据えた基盤形成

特に、「同じ川越町の子どもを育てている」という意識を共有し、園種や設置主体を越えて学び合う関係が形成され始めたことは、本事業の重要な成果であると考えられる。



第 2 章 事業開始にあたっての協議

1. 第 1 回ミーティングの概要

令和 7 年度川越町小規模保育事業者など巡回指導事業の開始にあたり、2025 年 6 月 17 日に第 1 回オンラインミーティングが開催された。

本会議には、川越町内の保育所、幼稚園、認定こども園、小規模保育事業所の代表者及び川越町子ども家庭課、巡回コーディネーターが参加し、本事業の趣旨説明、各園の課題共有、今後の方向性について意見交換が行われた。

本会議は、単なる事業説明ではなく、「川越町全体で保育・幼児教育を支える関係性をどのように形成していくか」を共有する場として位置づけられた。

参加者

- ・田村禎章(東海学院大学健康福祉学部総合福祉学科)
- ・杉浦公紀(杉浦社会福祉士事務所)
- ・北部保育所
- ・中部保育所
- ・南部保育所
- ・川越幼稚園
- ・ひばりこども園
- ・もりのくに褒育園川越
- ・川越町子ども家庭課

2. 事業趣旨と背景

コーディネーターより、本事業の背景として、川越町内の保育環境が大きく変化していることが説明された。特に、

- ・小規模保育事業所の設置
- ・川越幼稚園の認定こども園化
- ・未満児保育の増加
- ・発達支援ニーズの高まり
- ・保護者支援の複雑化
- ・保育士不足

などを背景として、各園が単独で課題解決することの難しさが増していることが共有された。

また、本事業は、外部講師が一方向的に指導する従来型ではなく、

- ・他園を実際に見る
- ・実践を共有する
- ・相互に学び合う
- ・自園を振り返る
- ・川越町全体として考える

ことを重視した巡回型研修として実施する方針が示された。

さらに、成果物を作成すること自体を目的化するのではなく、まずは各園が互いの実践を知り、率直に語り合える関係性を形成することを重視する方向性が確認された。

3. 各園から出された意見

(1)実践の専門性と質の向上

各園からは、子どもの主体性をどのように保障するか、未満児保育や要配慮児支援をどのように行うかなど、保育実践そのものに関する課題が共有された。

具体的には、

- ・個々に応じた保育
- ・子どもの主体性
- ・発達支援
- ・就学接続
- ・ICT 活用
- ・事例検討

など、について、各園が試行錯誤を重ねている現状が語られた。

もりのくに褒育園からは、「褒め育」を軸とした実践や「手ぶら保育」について紹介があり、ひばりこども園からは、子どもの主体性を重視した異年齢活動について共有された。

川越幼稚園からは、「自ら選んで遊ぶ遊び」を重視した実践や、子どもの主体性を中心とした保育計画について説明があった。

(2)人材育成とマネジメント力の強化

各園から共通して挙げられた課題の一つが、人材育成であった。

特に、

- ・若手職員育成
- ・新人受け入れ
- ・中途採用者支援
- ・メンタルケア
- ・世代間コミュニケーション
- ・主任層育成

などが重要な課題として共有された。

南部保育所からは、若手職員への一方的指導ではなく、「一緒に考える」関わりを大切にしていることが紹介された。また、園からは、職員間のコミュニケーションや園内研修の難しさについても率直な意見が出された。一部の園では、外部講師を活用した園内研修を実施している一方、時間確保や人員配置の問題から、十分な研修体制を整えることの難しさも共有された。

(3)保護者対応・地域との関係構築

保護者対応についても、各園から多くの意見が出された。

特に、

- ・保護者との価値観の違い
- ・カスタマーハラスメント
- ・発達支援に関する説明
- ・保護者支援
- ・家庭との連携

などについて課題が共有された。

川越幼稚園からは、困難な保護者対応について他園と情報共有したいとの意見があり、もりのくに褒育園からは、発達支援に関する保護者への伝え方の難しさが語られた。

また、近年は保護者の就労状況や家庭環境も多様化しており、園側が子どもの情緒の安定や生活保障をより強く担う必要があるとの認識も共有された。

(4)園の運営・組織体制

園運営については、

- ・限られた人員配置
- ・職員配置基準
- ・園内情報共有
- ・働き方
- ・ICT 活用
- ・業務効率化

などが大きなテーマとなった。

各園からは、「やりたい保育」と「できる保育」の間で葛藤があるという率直な声も出されていた。

特に未満児保育では、安全面への配慮や加配児対応などから、職員負担が大きくなっている現状が共有された。また、ICT 導入が進んでいる園もある一方、情報共有や写真管理などの負担も課題として挙げられた。

(5)園間連携・ネットワーク形成

本事業では、園間連携そのものを重要なテーマとして位置づけていた。

各園からは、

- ・他園を知る機会が少ない
- ・実際に保育を見る機会が必要
- ・同じ川越町の子どもを育てている
- ・園同士が学び合える関係が必要

などの意見が出された。中部保育所からは、「もりのくに褒育園とも、川越町の子どもと一緒に育てる仲間として歩んでいきたい」との意見も出され、本事業が単なる研修ではなく、地域全体の子育てネットワーク形成として期待されていたことがうかがえた。

4. 本年度のテーマ設定

第 1 回ミーティングでは、現時点で固定的な成果物を決めるのではなく、まずは各園を巡回し、現場を実際に見ながらテーマを整理していく方針が確認された。

そのうえで、本年度を通して以下のようなテーマを共有していく方向性が示された。

- ・子どもの主体性
- ・異年齢保育
- ・発達支援
- ・保護者支援
- ・若手職員育成
- ・園内研修
- ・ICT 活用
- ・安全管理
- ・保育士の働き方
- ・認定こども園化
- ・園間連携

これらは、その後の巡回指導において繰り返し議論される重要テーマとなった。

5. 巡回指導の進め方

本年度の巡回指導では、

1. 各園を実際に訪問する
2. 公開保育や環境構成を見る
3. 園の説明を受ける
4. 参加者同士で意見交換する
5. 振り返りを共有する

という流れを基本として実施することが確認された。

また、

- ・過度な成果物負担を求めない
- ・現場の声を尊重する
- ・率直に語り合える場とする
- ・園の違いを認め合う
- ・優劣ではなく学び合いを重視する

ことが、本事業全体の基本姿勢として共有された。

6. 第 1 回ミーティングを通して見えてきたこと

第 1 回ミーティングでは、各園が抱える課題は異なる一方で、多くの共通認識があることが確認された。また、本事業を通して、「同じ川越町の子どもを育てている」という意識が共有され始めたことは、その後の巡回指導全体の基盤となっていく。

第3章 各園から出された課題と研修目標

1. 実践の専門性と質の向上

本事業の開始にあたり、各園からは、日々の保育実践に関する多様な課題や悩みが共有された。特に共通して挙げられたのは、

- ・子どもの主体性をどのように支えるか
- ・未満児保育をどのように行うか
- ・発達支援や要配慮児支援をどう進めるか
- ・子どもの育ちをどのように見取るか

といった、保育の根幹に関わるテーマであった。

川越幼稚園では、「自ら選んで遊ぶ遊び」を中心に据えた保育実践が行われており、子どもが主体的に遊びを選択し、そこで充実した時間を過ごすことを大切にしていることが共有された。

また、日々の活動やねらいについても、単に行事をこなすのではなく、

- ・一週間単位での見通し
- ・遊びごとのねらい
- ・子どもの姿
- ・保育者の意図

などを職員間で共有しながら保育が積み重ねられていた。

一方、北部保育所では、劇活動を「発表会のための練習」としてではなく、「生活の延長」として位置づけていることが印象的であった。

子どもがやりたい役を選び、日常の遊びの延長線上で表現活動が自然に積み重ねられており、参加者からは、

「劇が生活の中に溶け込んでいる」

「無理にやらせていない」

といった感想が出された。

また、南部保育所では、絵本を単に「読むもの」としてではなく、

- ・子どもの興味を広げる
- ・遊びにつなげる
- ・保護者との共有につなげる

ための実践として位置づけていることが共有された。

ひばりこども園では、「チャレンジタイム」を通した異年齢活動や身体づくりの取組が紹介され、もりのくに褒育園では、「褒め育」を中心とした自己肯定感を重視する実践が共有された。

各園の実践はそれぞれ異なっていたが、共通していたのは、「子どもの育ちを中心に据えている」という点であった。

その一方で、各園からは、

- ・保育士不足
- ・人員配置
- ・発達支援

- ・保護者対応
- ・行事負担

などにより、「理想と現実の間で葛藤している」という率直な声も出されていた。特に未満児保育では、安全面や発達面への配慮が求められる一方、現場では十分な人員配置が難しい状況も共有された。そのため、本事業では、単に「良い実践」を紹介するだけでなく、

- ・なぜその実践を行っているのか
 - ・どのような条件の中で行われているのか
 - ・現場では何に悩んでいるのか
- を含めて共有することが重要視された。

2. 人材育成とマネジメント力の強化

本年度の巡回指導を通して、各園から特に多く共有されたテーマの一つが、人材育成であった。各園では、

- ・若手職員育成
- ・中途採用者支援
- ・主任層育成
- ・園内研修
- ・職員間コミュニケーション

などについて、それぞれ工夫しながら取り組んでいることが共有された。南部保育所では、若手職員への関わりとして、「一方的に教えるのではなく、一緒に考える」ことを重視しているとの説明があった。

また、職員自身が実際に遊びを体験する園内研修を行い、

- ・子どもの育ち
- ・年齢ごとのねらい
- ・遊びの意味

を体感的に理解する機会を設けていることが共有された。

川越幼稚園では、外部講師による年間約 20 回の研修を実施しており、

- ・指導案検討
- ・公開保育
- ・映像記録
- ・事後検討

などを通して、職員全体で保育実践を振り返る体制が構築されていた。また、園長や主任も含めて研修を受けていることから、「保育実践だけでなく、マネジメントも含めて学ぶ文化」が形成されていることが特徴として共有された。

一方で、他園からは、

- ・園内だけで研修を行う難しさ
- ・職員同士の遠慮
- ・指摘への防衛反応
- ・時間確保の困難さ

などについて率直な意見も出された。特に、「今日は本来の姿ではない」「そう言われると良い気がしない」といった空気が生まれることもあり、内部だけで完結する研修の難しさが共有された。

そのため、参加者からは、「外部の視点が入ることで、振り返りやすくなる」との意見も出されていた。また、保育は一日を通して継続しているため、「誰かが研修に出ると、現場に残る職員の負担が増える」という構造的課題も繰り返し共有された。

- ・パート配置
- ・休憩確保
- ・ICT 活用
- ・業務整理

なども含めて、人材育成を支える体制づくりが必要であるとの認識が共有された。

3. 保護者対応・地域との関係構築

本年度の巡回指導では、保護者対応についても、多くの課題や実践が共有された。

各園からは、

- ・発達支援に関する説明
- ・噛みつきや怪我対応
- ・カスタマーハラスメント
- ・保護者との価値観の違い
- ・子育て不安への対応

などについて、現場の難しさが語られた。

北部保育所では、

- ・噛みつき対応
- ・傷の説明
- ・保護者への伝達
- ・情報共有

について、現場の具体的な葛藤が共有された。特に、「やった側の保護者にどこまで伝えるか」「地域が狭いため保護者同士がつながっている」といった現実的な難しさが語られた。

また、ひばりこども園では、発達支援に関する保護者支援として、

- ・発達検査
- ・保健師
- ・心理職
- ・巡回相談
- ・専門機関

などと連携しながら、時間をかけて合意形成を行っていることが共有された。

もりのくに褒育園でも、発達障害などの可能性がある子どもへの対応や、保護者への伝え方について課題意識が示されていた。

さらに、近年は保護者の就労状況や生活環境も変化しており、

- ・長時間保育
- ・家庭時間の減少

- ・子どもの情緒
- ・保護者の余裕のなさ

なども、現場で大きなテーマとなっていることが共有された。参加者からは、「保育所が子どもの情緒の安定を担う役割が大きくなっている」との意見も出されていた。また、外国ルーツ家庭への対応についても話題となり、

- ・翻訳アプリ
- ・個別説明
- ・多文化対応

などの工夫が共有された。一方で、「理解したと言われても、実際には十分伝わっていない場合がある」との難しさも共有されていた。こうした課題について、各園からは、「園単独では限界がある」という認識も示されており、

- ・行政
- ・福祉部門
- ・専門機関
- ・園間ネットワーク

を含めた連携の必要性が共有された。

4. 園の運営・組織体制の整備

本年度の巡回指導では、保育内容だけでなく、それを支える組織体制についても多くの議論が行われた。

特に各園から共通して出された課題は、

- ・人員配置
- ・職員負担
- ・休憩確保
- ・情報共有
- ・業務量
- ・ICT 活用

などであった。

ひばりこども園では、

- ・ICT による登降園管理
- ・計画管理
- ・写真共有
- ・延長料金管理

などを一体的に行っており、業務効率化の工夫が共有された。

- ・写真選定
- ・コメント入力
- ・情報量の増加

など、新たな負担も発生していることが共有された。また、休憩確保についても、「子どもから完全に離れる」ことを基本としながら、職員配置を調整している実践が紹介された。

しかし、多くの園では、「休憩や会議時間を確保すること自体が難しい」との課題が共有されていた。また、各園からは、「新しい取組を足すだけではなく、何を減らすかを考える必要がある」との意見も出されていた。

これは、保育士不足や働き方の問題が深刻化する中で、

- ・業務整理
- ・合理化
- ・ICT 活用
- ・会議体制

などを含めて、組織全体を見直す必要性が高まっていることを示している。

5. 園間連携・ネットワーク形成

本事業の大きな目的の一つが、園間連携の形成であった。参加者からは、「他園を見る機会がほとんどなかった」「実際に現場を見ることで理解が深まった」との声が多く出された。

- ・保育理念
- ・子どもの姿
- ・職員体制
- ・保護者対応
- ・環境構成

などについて、実際に現場を見ることの重要性が共有された。特に、「同じ川越町の子どもを育てている」という意識が繰り返し語られたことは、本事業の特徴的な点であった。

各園は、公立、私立、幼稚園、認定こども園、小規模保育など、設置形態も理念も異なっている。しかし、巡回を重ねる中で、「違いを知ること」そのものが学びとなっていた。

- ・他園の実践をそのまま真似するのではなく
- ・自園を見直す視点として持ち帰る

という姿勢も共有されていた。そのため、本事業は単なる巡回指導ではなく、「町全体で保育を支えるネットワーク形成」としての意味を持つ取組となっていた。



第4章 第1回巡回指導記録:もりのくに褒育園川越

1. 実施概要

第1回巡回指導は、2025年8月25日、もりのくに褒育園川越において実施された。

本巡回には、川越町内の保育所、幼稚園、認定こども園、小規模保育事業所の代表者及び川越町子ども家庭課、巡回コーディネーターが参加し、園見学、保育実践の共有、意見交換などが行われた。もりのくに褒育園川越は、令和7年2月から川越町の巡回指導事業へ新たに参加した小規模保育事業所であり、他園にとっても実際の保育環境や理念を知る初めての機会となった。

2. 園の概要と方針

園長より、本園は小規模保育事業所として、

- 家庭的な雰囲気
- 子ども一人ひとりへの丁寧な関わり
- 保護者支援
- 職員の働きやすさ

を重視していることが説明された。特に本園では、「子どもファースト」を基本理念として掲げており、そのうえで、

- 子ども
- 保護者
- 職員

の三者を大切にする保育を目指していることが共有された。

また、本園の特徴として、「褒め育」をキーワードにした保育実践が紹介された。

これは、子どもの良い部分や成長を積極的に認め、自己肯定感を育てることを大切にする考え方であり、日常の関わりの中で、

- 子どもの姿を丁寧に見る
- 良い行動を認める
- 成長を保護者と共有する

ことを重視しているとの説明があった。

3. 保育実践の特徴

(1)少人数保育を生かした関わり

本園では、定員12名という小規模保育の特徴を生かし、一人ひとりの興味や関心に応じた保育を行っていることが共有された。

年齢構成は、

- 0歳児 1名

- ・1歳児 10名

- ・2歳児 1名

であり、職員配置を厚くすることで、子どもに寄り添った保育を行っていることが説明された。

- ・クッキング活動

- ・日常の遊び

- ・行事

- ・食育

などについても、子どもの負担を優先し、無理をさせないことを大切にしているとの説明があった。参加者からは、「子ども一人ひとりを丁寧に見ている」「落ち着いた雰囲気がある」との感想が出された。

(2)「褒め褒め会」の実践

本園では、「褒め褒め会」と呼ばれる取組を行っており、子どもの成長や良い姿をカードに記録し、家庭と共有していることが紹介された。これは単に褒めるだけではなく、

- ・子どもの変化に気づく

- ・保護者と共有する

- ・成長を積み重ねとして見る

ことを目的としているとの説明があった。

参加者からは、「子どもの自己肯定感につながる」「保護者支援としても意味がある」との評価がある一方、「日常の中で即時的に褒めることも重要ではないか」との意見も出された。

(3)手ぶら保育

本園では、「手ぶら保育」を導入しており、

- ・布団

- ・衣類

- ・コップ

などを園側で用意していることが紹介された。保護者の負担軽減を目的とした取組であり、現在のところ衛生面などについて大きな問題は生じていないとの説明があった。

参加者からは、

「保護者支援として興味深い」

「今後の働き方や家庭支援を考えるうえで参考になる」

との意見が出された。

4. 職員体制と働き方

(1)柔軟な勤務体制

本園では、子育て中の職員などにも配慮しながら、柔軟に勤務調整を行っていることが共有された。

また、職員間では、

- ・互いを認め合う

- ・褒め合う
- ・支え合う

文化づくりを大切にしていることが説明された。ミーティングにおいても、否定的な振り返りだけでなく、「良かったこと」「できていること」を共有することを重視しているとの説明があった。

(2)新人研修

新人研修については、マニュアル中心ではなく、「現場同行型」で実施していることが共有された。実際の保育現場の中で、

- ・子どもとの関わり
- ・保護者対応
- ・職員間連携

などを学ぶ形式をとっているとの説明があった。一方、参加者からは、「実践同行は良いが、一定の標準的指針もあると安心できる」との意見も出されていた。

5. 意見交換の要点

(1)声量・関わり方について

参加者からは、「職員の声量がやや大きく感じる場面があった」との指摘があった。

これに対し園側からは、

- ・褒める場面
- ・歌遊び
- ・集団への声かけ

などでは必要な場面もあるとの説明があった。このやり取りを通して、「子どもへの関わり方」「保育者の声の使い方」について、各園の考え方や文化の違いも共有された。

(2)保護者支援について

本園では、お迎えが遅れた保護者に対し、「まず理由を聞く」姿勢を大切にしているとの説明があった。

参加者からは、「保護者支援として大切」との意見が出された一方、「職員負担とのバランスも必要」との意見も共有された。

(3)発達支援について

園側からは、

- ・発達障害の子どもの傾向
- ・発達の気になる子ども
- ・保護者への伝え方

などについて難しさを感じていることが共有された。特に、小規模園では保護者との距離が近い分、「どのように伝えるか」が重要になるとの説明があった。

6. 巡回指導の意義

本巡回では、各園から、「園ごとに理念や条件が異なるため、そのまま真似することはできない」

との意見が出された。

一方で、

- ・他園を見ること
- ・実際に現場を知ること
- ・保育観を共有すること

そのものに大きな意味があるとの認識が共有された。また、参加者からは、

- ・保護者対応
- ・職員研修
- ・発達支援
- ・働き方

などについて、今後さらに議論を深めたいとの意見も出された。

7. 総括

巡回の最後に、園長から、「子どもファースト × スタッフファースト × 保護者支援」を重視しながら、小規模園だからこそできる挑戦を続けていきたいとの言葉があった。

また、コーディネーターからは、本日の巡回で共有された学びを、「川越町全体の保育の質向上につなげていきたい」との総括が行われた。本巡回は、本事業における最初の公開保育であったが、各園が互いの実践を知り、率直に語り合う関係づくりの第一歩となった。



第5章 第2回巡回指導記録:川越幼稚園

1. 実施概要

第2回巡回指導は、2025年11月25日、川越幼稚園において実施された。

本巡回には、川越町内の保育所、認定こども園、小規模保育事業所、川越町子ども家庭課、巡回コーディネーターが参加し、園見学、公開保育、意見交換などが行われた。

本巡回では、川越幼稚園が実践している、

- ・「自ら選んで遊ぶ」
- ・子どもの主体性を重視した保育
- ・園内研修体制
- ・認定こども園化への対応

などについて重点的な共有が行われた。

また、幼稚園と保育所・こども園との違いや共通点についても、多くの意見交換が行われた。

2. 川越幼稚園総評 ― 自ら選んで遊ぶと保育計画 ―

川越幼稚園では、「先生が一斉にやらせる活動」だけではなく、「子どもが自ら選ぶ遊び」を重視していることが説明された。子どもが主体的に遊びを選択し、その中で充実した時間を過ごすことを保育の中心に据えていることが共有された。

また、活動については単に自由遊びとして扱うのではなく、

- ・日々の活動
- ・一週間単位の計画
- ・活動ごとのねらい
- ・子どもの姿

などを、職員全体で共有しながら実践していることが説明された。

園内では、

- ・「自ら選ぶ遊び」
- ・「主活動」

それぞれについて、毎日ねらいを設定しており、園長・主任を含めて共通の帳票を用いて保育内容を共有していることが紹介された。

参加者からは、「落ち着いた雰囲気」「子どもが安心して遊んでいる」「子どもが主体的に動いている」との感想が多く出された。

3. 各園からの所感・意見

(1) 情緒の安定と家庭時間の違い

参加者からは、川越幼稚園の子どもたちについて、「情緒が安定している」「クラス全体が穏やかで落ち着いている」

との印象が共有された。

特に、

- 一部屋あたりの人数
- 学年ごとの環境
- ゆったりした関わり

などが、子どもの安定につながっているのではないかと意見が出された。

一方、保育所側からは、

- 朝 7 時から 19 時まで利用する子ども
- 長時間保育
- 保護者の就労状況

などについて共有があり、「家庭で親子が過ごす時間の違い」が、子どもの情緒や安定感にも影響しているのではないかと意見が出された。また、「今後は保育所側が、情緒の安定をより保障していく必要がある」との問題意識も共有された。

(2) 幼保の違いと「就学時の姿」

参加者からは、「幼稚園と保育所では、子どもの姿が明確に違う」

との意見も出された。

特に保育所では、

- 長時間保育
- 養護的役割
- 生活支援

の比重が大きく、「養護をどう保障するか」が重要になるとの整理がなされた。

一方で、「同じ小学校へ進学する子どもたち」であることから、

- 幼稚園
- 保育所
- 認定こども園

が、就学時の子どもの姿を共有しながら保育を進める必要があるとの認識も共有された。

具体的には、

- 幼保交流
- 教師・保育士同士の会議
- 言葉による伝え合い
- 子どもの姿の共有

などが行われていることが紹介された。

(3) 環境構成・教材づくり

参加者からは、川越幼稚園の環境構成について、「既製品のおもちゃに頼りすぎではない」

との評価が多く出された。子どもの興味や関心に応じて、

- 教材
- 遊具
- コーナー

などが工夫されており、子どもが主体的に遊びに入りやすい環境づくりが行われていることが共

有された。また、「担任自身が実際に園を見学する機会があると良い」との意見も出され、公開保育の継続への期待も示された。

4. 研修体制・園内研修に関する議論

(1)川越幼稚園の研修体制

川越幼稚園では、外部講師を活用した園内研修を年間約 20 回実施していることが共有された。研修では、

- ・指導案作成
- ・公開保育
- ・相互参観
- ・事後検討

などを行っており、単に講義を受けるだけではなく、「実際の保育を見ながら振り返る」ことが重視されていた。また、夏期には、

- ・実践映像の共有
- ・職員全体での検討

なども行われていることが紹介された。

研修テーマとしては、「子どもの見方・捉え方」を重視しており、各クラスが最低 2 回は指導対象となる体制が取られていることが共有された。

(2)他園の研修体制と課題

一方、他園からは、

- ・園内だけで完結する研修の難しさ
- ・職員間の遠慮
- ・指摘への抵抗感

などについて率直な意見が出された。参加者からは、「外部の専門家が入ることで振り返りやすくなる」との意見も共有された。

また、公立保育所では、

- ・就学前アドバイザー
- ・公開保育
- ・研究発表

などを実施しているものの、

「対象が年長児や一部職員に偏っている」

との課題も共有された。

さらに、「保育中に研修時間を確保する難しさ」についても多くの意見が出された。

5. 人員配置・働き方と研修

本巡回では、

- ・人員配置
- ・保育士不足

- ・研修時間

- ・働き方

などについても多くの議論が行われた。参加者からは、「誰かが研修に出ると、その分現場負担が増える」との意見が出された。

また、

- ・パート配置

- ・昼間研修

- ・拘束時間内研修

などの必要性についても共有された。コーディネーターからは、「現場だけで抱え込まず、人事や行政とも共有する必要がある」との指摘があった。

6. 研修のデジタル化・e ラーニングに関する提起

本巡回では、研修のデジタル化についても議論が行われた。各園からは、

- ・キャリアアップ研修

- ・動画視聴

- ・オンライン研修

などの現状が共有された。

一方で、「事例検討や子どもの姿の共有は、対面で行いたい」との意見も多く出された。コーディネーターからは、

- ・オンデマンド学習

- ・ワークシート

- ・短時間ディスカッション

- ・システム化された e ラーニング

などについて紹介があり、「対面を残しながら合理化する必要性」が提起された。

また、

- ・未満児保育の増加

- ・見えない労働

- ・保育士不足

が続く中で、「時間外・休日研修を積み上げる現状は持続しにくい」との問題意識も共有された。

7. 認定こども園化への不安と期待

川越幼稚園では、将来的な認定こども園化を控えていることから、

- ・未満児受け入れ

- ・生活リズムの違い

- ・カリキュラム調整

などへの不安も共有された。職員の中には保育所経験者もいるものの、「これまでとは異なる生活スタイルの子どもが入ってくる」ことへの戸惑いも率直に語られた。

一方で、

- ・幼稚園の強み

・落ち着いた環境

・研修文化

を生かしながら、

「保育所側からも学んでいきたい」

との姿勢も共有された。

8. 総括

本巡回では、

・幼稚園

・保育所

・認定こども園

・小規模保育

それぞれの違いと共通点が率直に共有された。

特に、「子どもの主体性」「情緒の安定」「保育士同士の学び合い」「働き方」などが重要テーマとして浮かび上がった。

また、本巡回を通して、「他園を見ることで、自園を相対化できた」との声も多く聞かれた。

本巡回は、川越町全体として保育・幼児教育をどのように支えていくかを考えるうえで、大きな学びの機会となった。



第 6 章 第 3 回巡回指導記録:ひばりこども園

1. 実施概要

第 3 回巡回指導は、2025 年 12 月22日、ひばりこども園において実施された。

本巡回には、町内の保育所、幼稚園、小規模保育事業所、川越町子ども家庭課、巡回コーディネーターなどが参加し、園見学、公開保育、意見交換、総括などが行われた。

本巡回では、

- ・異年齢活動
- ・チャレンジタイム
- ・戸外活動
- ・発達支援
- ・ICT 活用
- ・職員体制
- ・保護者対応

などについて重点的な共有が行われた。また、施設環境や動線、安全管理についても、多くの意見交換が行われた。

2. 当日の保育状況

当日は、各クラスの活動や異年齢活動の様子が公開された。

園内では、

- ・年齢別活動
- ・異年齢交流
- ・チャレンジタイム
- ・戸外遊び

などが自然に行われており、子どもたちが主体的に活動している姿が見られた。

参加者からは、「子どもたちが落ち着いている」「先生が子どもの動きをよく見ている」「声かけが柔らかい」との感想が出された。

また、園舎内の動線についても、

- ・子どもが移動しやすい
- ・職員が見守りやすい
- ・活動が分断されにくい

といった特徴が共有された。

3. 異年齢活動とチャレンジタイム

ひばりこども園では、異年齢交流を積極的に取り入れていることが特徴として共有された。

特に「チャレンジタイム」では、

- ・跳び箱
- ・鉄棒

- ・マット
- ・バランス運動

などに取り組んでおり、子どもが自分のペースで挑戦できる環境づくりが行われていた。参加者からは、「できる・できないだけでなく、挑戦することを大切にしている」との評価があった。また、年上児が年下児を自然に支える姿も見られ、「異年齢の関わりが生活の中に溶け込んでいる」との感想が共有された。園側からは、「無理にやらせるのではなく、自分からやりたくなる環境を大切にしている」との説明があった。

4. 戸外活動における安全管理

本巡回では、安全管理についても多くの議論が行われた。

ひばりこども園では、

- ・園庭活動
 - ・散歩
 - ・戸外活動
- などを積極的に行っている一方、
- ・死角
 - ・動線
 - ・人数確認
 - ・職員配置

などについて細かな配慮を行っていることが共有された。参加者からは、「子どもを止めすぎない安全管理」が印象的であったとの意見が出された。また、活動中には、

- ・声を掛け合う
- ・子どもの位置を共有する
- ・危険箇所を事前確認する

などの実践が自然に行われていることが共有された。

さらに、

- ・散歩先で災害が起きた場合
- ・不審者対応
- ・熱中症対応

などについても課題意識が共有された。

5. 環境構成・素材活用の工夫

参加者からは、園内環境について、「既製品に頼りすぎしていない」との感想が多く出された。保育室では、

- ・段ボール
- ・木材
- ・布
- ・自然素材

などを活用し、子どもが自由に組み合わせながら遊べる環境が構成されていた。

- ・子どもの目線
- ・手の届く高さ
- ・自由に選べる配置

などが工夫されていた。

参加者からは、「遊び込みやすい」「子どもの発想が広がる」との意見が出された。園側からは、「完成された玩具を与えるだけではなく、子ども自身が工夫できる余地を残したい」との説明があった。

6. 発達支援・保護者対応・転園判断

本巡回では、発達支援についても具体的な共有が行われた。

園側からは、

- ・発達検査
- ・巡回相談
- ・心理職との連携
- ・保健師との協議

などを行いながら、支援を進めていることが共有された。また、保護者への説明については、「一度に伝えるのではなく、少しずつ共有していく」ことを大切にしているとの説明があった。

一方で、「保護者が受け止めきれない場合もある」

との難しさも率直に語られた。

また、

- ・環境変更
- ・人数規模
- ・刺激量

などを踏まえ、「子どもにとってより合う環境はどこか」を検討する場面もあることが共有された。

参加者からは、「転園を含めて考えることは簡単ではない」との意見も出された。

7. 職員配置・休憩・会議体制

ひばりこども園では、

- ・職員休憩
- ・会議
- ・情報共有

などについても工夫していることが共有された。

特に休憩については、「子どもから完全に離れる」ことを基本としており、交代制で休憩を確保していることが紹介された。

また、会議についても、

- ・長時間化しない
- ・要点を絞る
- ・必要な職員で行う

などの工夫が共有された。一方で、参加者からは、「休憩を確保したくても人員的に難しい」

との意見も多く出された。また、「研修や会議を増やすほど、現場負担が増える」という課題も共有された。

8. ICT 活用と保護者連絡

ひばりこども園では、ICT を積極的に活用していることが紹介された。

具体的には、

- ・登降園管理
- ・延長保育管理
- ・写真共有
- ・保護者連絡
- ・指導計画

などについて、ICT を活用しているとの説明があった。参加者からは、「業務効率化につながっている」との意見が出された一方、

- ・写真選定
- ・コメント入力
- ・情報量増加

など、新たな業務負担も生じていることが共有された。また、ICT 化によって、「保護者への情報提供量が増えた」一方、「どこまで対応するか」という課題も共有された。

9. 総括

本巡回では、

- ・子どもの主体性
- ・異年齢活動
- ・発達支援
- ・安全管理
- ・ICT 活用
- ・働き方

などについて、多くの実践と課題が共有された。

特に、「子どもを止めすぎない安全管理」「挑戦したくなる環境づくり」「異年齢の自然な関わり」などは、参加者にとって大きな学びとなっていた。また、本巡回を通して、「園ごとの違いを知ること」そのものが重要な学びであることも改めて確認された。

さらに、

- ・発達支援
- ・保護者対応
- ・ICT
- ・働き方

などについては、今後も継続的に情報共有していく必要性が共有された。

本巡回は、川越町全体として保育・幼児教育を支えるネットワーク形成に向けた重要な機会となった。



第 7 章 第 4 回巡回指導記録:南部保育所

1. 実施概要

第 4 回巡回指導は、2026 年 1 月 20 日、南部保育所において実施された。本巡回には、町内の保育所、幼稚園、認定こども園、小規模保育事業所、川越町子ども家庭課、巡回コーディネーターなどが参加し、公開保育、園内見学、意見交換、総括などが行われた。

- ・異年齢交流
- ・絵本を活用した保育
- ・若手職員育成
- ・子どもの主体性
- ・職員間連携

などを中心に実践共有が行われた。また、保育士同士の関係づくりや、日常の中での学び合いについても多くの意見交換が行われた。

2. 南部保育所の実践共有

南部保育所では、

- ・子どもが安心して過ごせる環境
- ・異年齢の自然な関わり
- ・子どもの主体性

を大切にしていることが共有された。

保育室では、子どもが自分で遊びを選択し、必要に応じて他クラスや異年齢児とも関わりながら生活している様子が見られた。

参加者からは、「子どもが落ち着いている」「先生が急がせすぎしていない」「子ども同士の関わりが自然」との感想が出された。また、園側からは、「子どもに指示を出しすぎない」「待つこと」を大切にしているとの説明があった。

3. 異年齢の関わり

南部保育所では、異年齢交流が日常の中に自然に組み込まれていることが特徴として共有された。特に、

- ・年上児が年下児を助ける
- ・遊び方を教える
- ・一緒に活動する

姿が自然に見られていた。

園側からは、「異年齢だから特別に交流させるのではなく、生活の中で自然に関わることを大切にしている」との説明があった。参加者からは、「年上児が優しく関わっている」「子ども同士で育ち合っている」との感想が共有された。また、発達差のある子どもにとっても、「異年齢の関わりが安心できる場になることがある」との意見も出された。

4. 若手職員育成

本巡回では、若手職員育成についても多くの意見交換が行われた。
南部保育所では、「一方的に教えるのではなく、一緒に考える」姿勢を大切にしていることが共有された。

特に、

- ・なぜその関わりをするのか
- ・子どもをどう見ているか
- ・保育者は何を意図しているか

を丁寧に言語化することを意識しているとの説明があった。

また、若手職員に対しては、「失敗を責めすぎない」「すぐ答えを与えすぎない」ことも重視していることが共有された。参加者からは、「ベテラン職員の立ち居振る舞いそのものが学びになっている」との意見も出された。

さらに、「保育はマニュアルだけでは学べない」

との意見も共有され、日常の保育の中で学び合うことの重要性が確認された。

5. 絵本を通した保育実践

南部保育所では、絵本を保育実践の中心的な要素として活用していることが共有された。

絵本は単なる読み聞かせではなく、

- ・子どもの興味を広げる
- ・遊びにつなげる
- ・子ども同士の会話を生む
- ・保護者との共有につなげる

ものとして位置づけられていた。参加者からは、「絵本から遊びが広がっている」「子どもが世界観に入り込んでいる」との感想が出された。また、園側からは、「絵本を読んで終わりではなく、その後の遊びや会話を大切にしている」との説明があった。

さらに、

- ・季節
- ・子どもの興味
- ・クラスの状況

に応じて絵本を選んでいることも共有された。

6. 各園参加者の気づき

本巡回では、参加者から多くの気づきや感想が共有された。

特に、「子どもを急がせすぎないこと」「保育者が待つこと」の重要性について、多くの意見が出された。また、「保育者同士の空気が柔らかい」「職員間のやり取りが自然」

との感想も多く出された。参加者からは、「保育内容だけではなく、職員同士の関係性も子どもに影響している」との意見も共有された。また、「異年齢交流を特別な活動にしていないこと」についても、多くの学びがあったとの感想が出された。

7. 巡回指導者による整理

巡回の総括では、

- 子どもの主体性
- 異年齢交流
- 若手職員育成
- 保育者同士の関係性

が重要な論点として整理された。コーディネーターからは、「子どもだけではなく、職員も安心していられる空気が保育には重要」との整理が行われた。また、「保育内容だけを切り取るのではなく、その背景にある職員間の関係や文化も含めて見る必要がある」との指摘もあった。さらに、「良い実践を真似すること」よりも、「なぜその実践が成立しているのかを考えること」の重要性が共有された。

8. 今後の予定

巡回の最後には、

- 各園で持ち帰る内容
- 今後共有したいテーマ

などについて確認が行われた。

参加者からは、

- 発達支援
- 保護者対応
- 働き方
- 若手育成

などについて、今後さらに情報共有したいとの意見が出された。また、「主任層だけでなく、担任も参加できると学びが広がる」との意見も共有された。本巡回は、保育実践だけでなく、「保育者同士がどのように支え合いながら保育をつくっているか」を共有する重要な機会となった。



第 8 章 第 5 回巡回指導記録:北部保育所

1. 実施概要

第 5 回巡回指導は、2026 年 2 月 17 日、北部保育所において実施された。本巡回には、町内の保育所、幼稚園、認定こども園、小規模保育事業所、川越町子ども家庭課、巡回コーディネーターなどが参加し、公開保育、園内見学、意見交換、総括などが行われた。

本巡回では、

- ・劇活動
- ・子どもの主体性
- ・異年齢交流
- ・職員間連携
- ・保護者対応
- ・年度目標と園内研修

などについて重点的な共有が行われた。また、発表会を「見せるための活動」にするのではなく、「生活や遊びの延長」としてどのように位置づけるかについて、多くの意見交換が行われた。

2. 発表会・劇活動の位置づけ

北部保育所では、劇活動について、「発表会のためだけに行うものではない」という考え方が共有された。園側からは、

- ・日常の遊び
- ・子どもの興味
- ・絵本の世界
- ・子ども同士のやり取り

などが積み重なる中で、自然に劇活動へつながっていくことを大切にしているとの説明があった。参加者からは、「子どもがやらされている感じが少ない」「生活と劇がつながっている」との感想が出された。

- ・子ども自身が役を選ぶ
- ・セリフを押し付けすぎない
- ・子どもの言葉を生かす

ことも重視しているとの説明があった。一方で、園側からは、「保護者側は“見せる発表会”を期待することもある」との難しさも共有された。

そのため、

- ・子どもの育ち
- ・過程
- ・日常とのつながり

を、どのように保護者へ伝えていくかが重要であるとの意見が出された。

3. 子どもの主体性と日常の保育

本巡回では、「子どもの主体性」についても多くの意見交換が行われた。園側からは、「子ども自身がやりたいと思うことを大切にしている」との説明があり、

- ・遊びの選択
- ・友達との関わり
- ・表現活動

などについて、子ども自身の意思を尊重することを意識していることが共有された。また、参加者からは、「先生が先回りしすぎていない」「待つ保育をしている」との感想も出された。一方で、「危険とのバランス」「時間との兼ね合い」「集団運営」などについては難しさも共有された。

園側からは、「全部自由にするのはではなく、子どもが安心して挑戦できる範囲を整えることが大切」との説明があった。

4. 異年齢交流と職員連携

北部保育所では、異年齢交流も日常の中で自然に行われていた。特に、

- ・年上児が年下児を助ける
- ・遊び方を教える
- ・困っている子に声をかける

姿が多く見られた。参加者からは、「年上児の関わり方が優しい」「子ども同士で育ち合っている」との感想が共有された。また、職員側についても、「担任だけで抱え込まない」ことを大切にしているとの説明があった。

園側からは、

- ・子どもの姿を共有する
- ・他クラスの様子を見る
- ・必要に応じて声を掛け合う

ことを日常的に行っているとの説明があった。参加者からは、「職員同士の空気感が柔らかい」との意見も出された。

5. 環境構成・施設面

本巡回では、施設環境についても多くの意見交換が行われた。園内では、

- ・コーナー保育
- ・絵本スペース
- ・表現活動スペース

などが工夫されており、子どもが自分で遊びを選択しやすい環境が整えられていた。

- ・子どもの動線
- ・見通し
- ・安全性

などについても配慮されていることが共有された。

一方で、園側からは、「建物の構造上、音が響きやすい」「集中しづらい場面もある」との課題も共有された。また、「限られた空間の中でどう工夫するか」が重要であるとの意見も出された。

6. 年度目標の振り返りと園内研修

北部保育所では、年度目標として、「子どもの主体性」を大切にすることを掲げていた。

園内研修では、

- ・子どもの姿をどう見るか
- ・保育者の関わり方
- ・遊びの意味

などについて、継続的に話し合いを行っていることが共有された。また、若手職員育成についても、「すぐ答えを与えるのではなく、一緒に考える」ことを大切にしているとの説明があった。

参加者からは、「園全体で子どもを見ている感じがある」との感想が出された。また、園側からは、「忙しい中でも、少しずつ話し合いを重ねている」との説明があった。

7. 保護者対応と情報共有

本巡回では、保護者対応についても具体的な共有が行われた。特に、

- ・噛みつき
- ・トラブル
- ・怪我
- ・保護者への説明

などについて、現場の難しさが率直に共有された。

参加者からは、「どこまで説明するか悩む」「保護者同士の関係もある」との意見が出された。また、「やった側・やられた側」双方への説明のバランスについても議論が行われた。

園側からは、「保護者の不安を受け止めながら、子どもの育ちとして伝えることを意識している」との説明があった。また、職員間では、

- ・情報共有
- ・保護者対応の統一
- ・記録

などを意識していることも共有された。

8. 総括

本巡回では、

- ・子どもの主体性
- ・劇活動
- ・異年齢交流
- ・職員間連携
- ・保護者対応

などについて、多くの実践と課題が共有された。特に、「発表会を生活の延長として位置づけること」「待つ保育」「子ども同士の育ち合い」などは、参加者にとって大きな学びとなっていた。

また、「良い実践を表面的に真似するのではなく、その背景にある考え方を見ることが重要」との意見も共有された。

- 保育者同士の関係性
- 園全体の空気感
- 子どもの安心感

なども、保育の質を支える重要な要素として整理された。本巡回は、保育内容だけでなく、「園文化そのものをどのように育てていくか」を考える機会となった。



第9章 第6回巡回指導記録:中部保育所・役場会議室

1. 実施概要

第6回巡回指導は、2026年3月17日、中部保育所及び川越町役場会議室において実施された。本巡回は、本年度の最終回として実施され、前半に中部保育所で園内見学及び公開保育を行い、後半に川越町役場会議室へ移動して意見交換及び総括を行った。

本巡回では、年度末の保育環境を踏まえながら、

- ・園運営と保育環境
 - ・子どもの育ちの共有
 - ・職員間連携
 - ・安全管理・避難訓練
 - ・異年齢保育
 - ・外国籍・外国ルーツ家庭への対応
 - ・次年度以降の巡回指導事業の方向性
- について意見交換が行われた。

2. 公開保育を踏まえた園運営・保育環境

中部保育所では、年度末という時期であったため、室内環境は通常時と異なる部分もあったが、日頃の保育の姿を見てもらう機会となった。施設面では、空間の広さや音の響きやすさがあり、支援を必要とする子どもにとっては過ごしづらさにつながる場合があることが共有された。

一方で、園舎の構造上、他クラスの様子が見えやすく、子どもも職員も自然に行き来しやすいことが利点として挙げられた。子どもが教室以外の場所も自然に生活や遊びの場として使っていることが特徴として示された。参加者からは、「園全体に家庭的で温かい雰囲気がある」「子どもにも職員にも良い環境である」「一学年一クラスの園では同学年同士で相談し合う機会が限られるが、自然な交流の中で学び合える環境の良さを感じた」との所感が共有された。

また、異年齢の子ども同士が自然に関わる姿は、将来の対人関係や生きる力にもつながると受け止められた。支援を必要とする子どもへの関わりも自然で温かく、子どもに合った居場所づくりがなされていると感じたとの意見があった。年齢やクラスに固定せず、その子が安心して過ごせる場所を大切にしている点が印象的であった。

3. 子どもの育ちの共有と職員間連携

中部保育所では、朝礼で全職員が子どもの具体的なエピソードを一つずつ共有する取組を行っていることが紹介された。この取組により、他クラスの子どもの姿も職員全体で把握しやすくなり、日常の会話や子ども理解の深まりにつながっていることが説明された。

園長の方針として、子どもの心の位置や育ちを丁寧に見つめる姿勢が共有されていることも説明された。参加者からは、「職員同士が自然に見て学び合い、子どもの姿を共有しながら保育をつくっている」「子どもの育ちを一人の担任だけで抱えず、みんなで見ていく仕組みがある」との意見が出さ

れた。

また、若手職員は、ベテラン職員の姿を日常的に見ることで学んでおり、言葉だけではない育成がなされていると感じたとの所感も示された。子どもの育ちと職員育成が、日常の保育の中で一体的に進んでいる点が評価された。他園からは、自園ではデジタルツールを用いて日々の子どもの姿や成長を職員間で共有しているとの紹介もあり、子どものことを共有することが、職員同士の対話や保育の連続性を生むとの意見が共有された。朝礼で子どものエピソードを共有する取組は、子ども理解と職員間連携の面で非常に参考になったとの意見があった。

4. 安全管理・避難訓練について

中部保育所では、避難訓練を毎月実施しており、訓練後には反省と改善の話し合いを行っていることが共有された。単に訓練を実施するだけでなく、

- ・避難経路
- ・備品配置
- ・避難導線
- ・職員の役割分担

などの見直しにつなげていることが説明された。

年度当初はベテラン職員に判断が集中する場面もあったが、年度末には若手職員が前面に立って対応できるようになってきたとの振り返りがあった。参加者からは、避難物品の置き方や避難導線に工夫が見られ、日々の訓練と振り返りの成果が表れていると感じたとの意見が出された。

また、園内の工夫が具体的であり、自園の見直しにもつながる学びがあったとの所感が示された。

一方で、他園からは、

- ・避難先
- ・避難経路
- ・防寒具の扱い
- ・散歩中の避難対応

などについて、まだ迷が多く、課題として認識しているとの意見も出された。園内だけでなく、散歩先で災害が起きた場合の備えも含めて、今後さらに検討が必要であることが確認された。

今回の見学を通して、自園に持ち帰って職員間で再検討したい事項が明確になったとの意見もあった。

5. 異年齢保育・子ども同士の関わり

中部保育所では、生活の拠点となる教室はあるものの、他の場所や他年齢の子どもとの関わりが日常的に生まれていることが共有された。子どもたちは特別に「交流」と意識することなく、自然な行き来の中で関係を築いていることが特徴として示された。参加者からは、「異年齢の子どもと関わるにより、同年齢だけでは得られない育ちがある」「発達差のある子どもにとっても、他年齢との関わりが遊びや関係づくりのきっかけになる可能性がある」との意見が出された。

異年齢保育の中では、年上児が年下児に自然に関わり、教えたり受け入れたりする姿が見られた。保育者が教え込むのではなく、子ども同士が関わりの中で学んでいく良さが改めて共有された。また、自園での異年齢保育の実践とも重なり、参考になる点が多かったとの所感もあった。

6. 外国籍・外国ルーツのある家庭への対応

本巡回では、外国籍・外国ルーツのある家庭への対応についても意見交換が行われた。配布物や連絡については、園独自に翻訳文を作るよりも、翻訳アプリを活用する方法を基本とすることが共有された。必要に応じて個別に翻訳を用いながら説明する対応を行っていることも説明された。一方で、日常会話レベルでは意思疎通できても、細かな説明や重要事項の伝達では、保護者が理解したと答えていても実際には十分伝わっていない場合があり、難しさがあると共有された。現時点では、大きな食文化・宗教上の配慮事例にはまだ直面していないが、今後の課題になる可能性が示された。

また、対象者数が少ないから対応を後回しにするのではなく、今後の増加も見据えて考える必要があるとの認識が共有された。園単独での対応には限界があるため、町全体の支援体制や関係機関との連携も重要であるとの意見があった。

7. 総括

総括では、本事業を通じて、現場を実際に巡回することで得られる学びが大きかったことが確認された。特に、次の論点が整理された。

- ・保育士同士の関係性、情報共有、研修体制
- ・子どもと職員双方の安全管理
- ・外国籍家庭を含む保護者対応
- ・他園の保育を知る機会の確保
- ・業務の合理化とデジタル活用
- ・生活困窮、外国人支援などを含む福祉的課題との連携

巡回指導で得られた知見は、報告書として整理し、各園にも共有していく方針が示された。また、次年度以降も継続実施の可能性があり、新設予定園も含めた見学や意見交換、テーマ設定型の取組も検討していく方向が共有された。



第10章 巡回指導を通して共有された主な論点

1. 子どもの主体性を支える保育

本年度の巡回指導を通して、最も多く共有された論点の一つが、「子どもの主体性」であった。各園では、

- ・子どもが自ら遊びを選ぶ
- ・自分で考える
- ・試行錯誤する
- ・異年齢児と関わる

ことを大切にしており、その具体的な実践は園ごとに異なっていた。

川越幼稚園では、「自ら選んで遊ぶ」を保育の中心に据えており、子ども自身が活動を選択し、遊び込める環境づくりが行われていた。北部保育所では、劇活動を「発表会のための練習」とするのではなく、「生活や遊びの延長」として位置づけており、子どもが主体的に表現活動へ参加していた。ひばりこども園では、「チャレンジタイム」を通して、子どもが自ら挑戦したくなる環境づくりが行われていた。

また、南部保育所では、「待つ保育」が大切にされており、子どもに過度な指示を出さず、自ら考えたり関わったりする時間を保障していることが共有された。一方で、

- ・集団運営
- ・安全面
- ・時間制約
- ・行事運営

などとのバランスの難しさも、各園から率直に共有された。そのため、本事業では、「何でも自由すること」を主体性と捉えるのではなく、「子どもが安心して挑戦できる環境を整えること」が重要であるという認識が共有された。

2. 異年齢保育と子ども同士の育ち合い

本年度の巡回では、多くの園で異年齢交流や異年齢保育が実践されていた。特に、

- ・年上児が年下児を助ける
- ・遊びを教える
- ・一緒に活動する
- ・自然に関係をつくる

姿が、各園で共有された。

中部保育所では、異年齢交流が特別活動としてではなく、生活の中に自然に溶け込んでいることが特徴的であった。

ひばりこども園でも、チャレンジタイムなどを通して異年齢児同士の自然な関わりが見られた。

また、北部保育所や南部保育所でも、「異年齢だから交流させる」のではなく、「生活の中で自然に関わる」ことを大切にしているとの説明があった。

参加者からは、「子ども同士で育ち合っている」「年上児が自然に優しく関わっている」との感想が多く共有された。

また、発達差のある子どもにとっても、「異年齢の関わりが安心感につながる場合がある」との意見も出された。その一方で、

- ・安全面
- ・空間構成
- ・活動内容
- ・職員配置

などについては工夫が必要であることも共有された。

3. 発達支援・要配慮児対応

本年度の巡回では、発達支援に関する話題が多く共有された。各園からは、

- ・発達障害児の傾向
- ・集団適応
- ・感覚過敏
- ・行動面
- ・保護者への伝え方

などについて、具体的な悩みが共有された。

ひばりこども園では、

- ・巡回相談
- ・発達検査
- ・保健師
- ・心理職

などと連携しながら支援を行っていることが紹介された。

また、もりのくに褒育園では、小規模園ならではの距離の近さがある一方、「保護者にどのように伝えるか」について難しさが共有された。

参加者からは、「一度で理解してもらうのは難しい」「少しずつ共有していく必要がある」との意見も出された。

- ・子どもに合う環境
- ・刺激量
- ・人数規模

などを考慮しながら、「子どもにとってどの環境が良いか」を検討する必要性も共有された。

一方で、「園だけでは抱えきれない」との認識も多くの園で共有されており、

- ・行政
- ・専門機関
- ・福祉部門

との連携の必要性が強く確認された。

4. 保護者対応・保護者支援

各園からは、保護者対応についても多くの課題が共有された。

- ・発達支援の説明
- ・噛みつきや怪我
- ・保護者同士の関係
- ・長時間保育
- ・保護者の余裕のなさ

などについて、現場の難しさが語られた。

北部保育所では、「やった側・やられた側」双方への説明の難しさが共有された。

また、「地域が狭いため、保護者同士がつながっている」ことによる配慮の必要性も語られた。

一方、もりのくに褒育園では、

- ・手ぶら保育
- ・褒め褒め会

などを通した保護者支援の実践が紹介された。

また、各園からは、「保育所が家庭支援の役割も担う場面が増えている」

との意見が多く出された。

- ・長時間保育
- ・家庭時間の減少
- ・保護者の就労状況

などにより、「子どもの情緒の安定を保育所側が支えている」との認識も共有された。

5. 職員間連携と情報共有

本年度の巡回では、保育実践だけでなく、「職員間の関係性」についても多くの議論が行われた。

各園からは、

- ・子どもの姿を共有する
- ・他クラスを見る
- ・声を掛け合う
- ・園全体で子どもを見る

ことの重要性が共有された。

中部保育所では、朝礼時に、「子どもの具体的エピソードを一人一つ共有する」取組が紹介された。

また、南部保育所や北部保育所では、「担任だけで抱え込まない」

ことを大切にしているとの説明があった。参加者からは、「職員同士の空気感が子どもに影響している」との意見も出された。

- ・情報共有
- ・職員間の信頼関係
- ・日常の声かけ

などが、保育の質を支える重要な基盤であることが確認された。

6. 若手職員育成と園内研修

各園では、若手職員育成についても多くの工夫が共有された。

共通していたのは、「一方的に教える」のではなく、「一緒に考える」姿勢を重視している点であった。

- ・ベテラン職員の立ち居振る舞い
- ・日常の関わり
- ・子どもの見方

そのものが学びになっているとの意見も共有された。川越幼稚園では、年間約 20 回の園内研修が行われており、

- ・指導案
- ・公開保育
- ・映像検討

などを通して学び合いが行われていた。

一方で、

- ・時間確保
- ・人員配置
- ・現場負担

などの課題も共有された。そのため、「研修を増やす」だけではなく、

- ・業務整理
- ・ICT 活用
- ・働き方改善

も含めて考える必要性が確認された。

7. 保育士の働き方と負担軽減

本年度の巡回指導では、「保育士の働き方」についても重要なテーマとして共有された。

各園からは、

- ・人員不足
- ・休憩確保
- ・持ち帰り業務
- ・行事負担
- ・会議負担

などについて率直な意見が出された。また、「保育士に心の余裕があることが、子どもへの良い関わりにつながる」との意見も共有された。

- ・ICT 導入
- ・会議整理
- ・業務合理化
- ・働き方見直し

などが重要であるとの認識が確認された。

8. ICT 活用と業務効率化

ひばりこども園をはじめ、各園では ICT 活用が進みつつあった。具体的には、

- ・登降園管理
- ・写真共有
- ・延長保育管理
- ・指導計画

などに ICT が活用されていた。

一方で、

- ・コメント入力
- ・写真選定
- ・情報量増加

など、新たな負担も生じていることが共有された。そのため、「ICT 化＝負担軽減」ではなく、「何を整理するか」が重要であるとの認識が共有された。

9. 安全管理・避難訓練

安全管理については、

- ・戸外活動
- ・散歩
- ・避難訓練
- ・不審者対応
- ・災害時対応

などについて議論が行われた。特に、「子どもを止めすぎない安全管理」という考え方が印象的であった。また、中部保育所では、

- ・避難訓練後の振り返り
- ・導線見直し
- ・備品配置

などを継続的に行っていることが共有された。

10. 外国ルーツ家庭への支援

中部保育所では、外国ルーツ家庭への対応についても共有が行われた。各園では、

- ・翻訳アプリ
- ・個別説明
- ・多文化対応

などを行っていることが共有された。

一方で、「理解したと言われても、実際には十分伝わっていない場合がある」との難しさも共有された。

また、今後さらに増える可能性がある」との認識も共有されており、町全体としての支援体制の必要性が確認された。

11. 園間連携と川越町全体の保育体制

本事業全体を通して、最も大きな成果の一つが、「園間連携」であった。参加者からは、「他園を見ることで、自園を見直せた」「同じ川越町の子どもを育てる仲間として考えられるようになった」

との声が多く出された。

- ・公立
- ・私立
- ・幼稚園
- ・認定こども園
- ・小規模保育

という違いを越えて、「互いに学び合う関係」が形成され始めたことは、本事業の大きな成果であった。



第 11 章 各園の振り返り

1. もりのくに褒育園川越

もりのくに褒育園川越からは、本事業を通して、「それぞれの園が子どもたちに対して大切にしている思いを知ることができた」との振り返りがあった。

- ・年齢に応じた対応
- ・各園の工夫
- ・保育の考え方

などについて、多くの学びがあったことが共有された。

一方で、巡回指導全体を通して、「保育士が置かれている環境を改善することが最優先課題ではないか」との問題提起も行われた。

- ・手作り文化
- ・持ち帰り業務
- ・保育士負担
- ・心理的余裕

などについて、現場の負担感が率直に語られた。

そのうえで、「保育士の心にゆとりがあることが、子どもへの良い関わりにつながる」との意見が共有された。また、「子どもも保育士も笑顔あふれる職業になってほしい」との言葉は、本事業全体を通して重要な視点として位置づけられるものであった。

2. 中部保育所

中部保育所からは、「普段なかなか交流のない園を訪問することで、それぞれの園が大切にしていることを知る機会になった」との振り返りが共有された。

特に、もりのくに褒育園について、「川越町がこれまで積み重ねてきた途切れのない支援の流れを共有できた」ことが印象的であったとの意見があった。

また、「同じ川越町の子どもを育てる仲間として歩んでいけるのではないか」との言葉も共有され、本事業が単なる巡回指導ではなく、町全体のネットワーク形成につながっていたことがうかがえた。

- ・新規園の参入
- ・認定こども園化

など、今後の変化を見据え、「互いを知る取組は今後必要」との意見が共有された。

一方で、「固定的なパンフレットや資料だけでは対応しきれない」との問題意識も示され、

- ・保護者支援
- ・保育士の働き方
- ・制度変更

など、現場が常に変化していることへの認識が共有された。

3. 川越幼稚園

川越幼稚園からは、「自園の保育だけを見ていると考えが凝り固まることもある」との率直な振り返りがあった。本事業を通して、

- ・他園の環境
- ・保育実践
- ・子どもの姿

を見ることで、「柔軟に考えられる機会が増えた」との意見が共有された。また、「他園を見ること」そのものが、自園を振り返る契機となっていたことがうかがえた。この振り返りは、本事業が単なる「指導」ではなく、「相互に学び合う巡回型研修」として機能していたことを示している。

4. ひばりこども園

ひばりこども園からは、「実際に園を見ることができたことが大きかった」との振り返りが共有された。

- ・環境設定
- ・動線
- ・子どもへの関わり
- ・限られた空間での工夫

などについて、多くの学びがあったことが共有された。また、「他園ではどのように行っているか」を直接聞くことができたことも有意義であったとの意見があった。さらに、「主任層だけではなく、実際に保育を行っている担任なども参加できるとさらに学びが深まるのではないか」との提案も共有された。これは、本事業が今後さらに現場職員レベルへ広がっていく可能性を示す意見として整理できる。

5. 北部保育所

北部保育所からは、「保育理念を聞き、実際に保育を見る機会が非常に勉強になった」との振り返りが共有された。

- ・同じ立場同士で話せたこと
- ・同じ悩みを共有できたこと
- ・各園の工夫を知れたこと

が大きな学びであったとの意見があった。

- ・園内研修
- ・コミュニケーション方法
- ・情報共有

などについても参考になったことが共有された。さらに、「同じ川越町の子どもを育てる仲間として、これからも連携していきたい」との言葉が共有され、本事業が町全体の連携形成につながっていたことがうかがえた。

6. 南部保育所

南部保育所からは、「各園の特色や良さを知ることができた」との振り返りが共有された。

また、「川越町の事業所として、お互いの園を理解して連携していくことが、安心して子育てできる町につながるのではないか」との意見が共有された。

一方で、「公立保育所三園は日頃から交流があるため、今後は参加方法を再検討してもよいのではないか」との意見も出された。これは、本事業が一定程度関係形成に寄与したからこそ出てきた意見として整理できる。

7. 振り返りから見える成果と課題

各園の振り返りを通して、共通して見えてきた成果として、

- ・他園を知ることができた
- ・自園を見直す機会になった
- ・同じ川越町の子どもを育てているという意識が生まれた
- ・園間連携の必要性を感じた

などが挙げられる。

また、本事業は、「実際に現場を見る」ことの意味が非常に大きかったことが確認された。

一方で、課題としては、

- ・保育士不足
- ・働き方
- ・研修時間確保
- ・職員負担
- ・発達支援
- ・保護者対応

などが継続的課題として共有された。特に、「保育士の心の余裕」について複数園から言及があったことは重要であり、

- ・保育の質
- ・職員配置
- ・働き方
- ・業務量

を切り離して考えることはできないという認識が共有されていた。また、

「成果物を作ること」そのものよりも、「互いを知り、相談できる関係を形成したこと」自体に大きな意義があったことも、本事業全体を通した重要な成果として整理できる。

第12章 総評

1. 本事業の意義

本年度の川越町小規模保育事業者など巡回指導事業は、単なる「巡回指導」にとどまらず、「相互に学び合う巡回型研修」として実施された点に大きな特徴があった。

各園は、それぞれ異なる制度や運営形態、理念を持っている。

- 子どもの人数
- 職員配置
- 建物環境
- 保護者層
- 地域性

なども異なっている。しかし、本事業を通して、各園が共通して、「子どもの育ちを中心に考えている」ことが確認された。

また、「同じ川越町の子どもを育てている」という意識が共有され始めたことは、本事業の重要な成果であった。

2. 相互に学び合う巡回型研修としての成果

本事業では、単に外部講師から助言を受けるのではなく、

- 他園を見る
- 実際の保育を見る
- 子どもの姿を見る
- 保育者同士で語り合う

ことを重視した。参加者からは、「他園を見ることで、自園を見直すことができた」「自園だけでは気づけなかった視点があった」との声が多く共有された。

- 子どもの主体性
- 異年齢交流
- 発達支援
- 保護者対応
- 職員間連携
- 働き方

などについて、率直に語り合える関係が形成されていった。本事業は、優れた実践を単に「真似する」ことを目的としたものではなく、「なぜその実践が成立しているのか」を互いに考え合う場として機能していた。そのため、巡回を重ねる中で、「違いを知ること」そのものが学びとなっていた。

3. 各園の違いを生かした学び

本事業では、各園の違いが明確に共有された。

- ・川越幼稚園では、「自ら選んで遊ぶ遊び」を重視した実践
- ・ひばりこども園では、異年齢交流やチャレンジタイム
- ・北部保育所では、生活とつながった劇活動
- ・南部保育所では、待つ保育や絵本実践
- ・もりのくに褒育園では、褒め育や保護者支援
- ・中部保育所では、家庭的な関係づくり

など、それぞれ異なる特徴が見られた。一方で、どの園にも共通していたのは、

- ・子どもを大切にしたい
- ・保護者を支えたい
- ・保育士同士で学び合いたい

という思いであった。本事業では、「違いを優劣で比較する」のではなく、「違いを知り、学び合う」ことが重視された。そのため、参加者からは、「自園にはない視点に気づけた」「自園の良さも改めて感じた」との声が多く共有された。

4. 職員育成・園内研修への示唆

本事業では、若手職員育成や園内研修についても多くの示唆が得られた。

各園からは、

- ・一方的に教えるだけでは育たない
- ・一緒に考えることが重要
- ・日常の関わりそのものが学びになる

との意見が共有された。

「保育はマニュアルだけでは学べない」との認識も、多くの園で共通していた。

一方で、

- ・研修時間の確保
- ・人員不足
- ・現場負担

などの課題も繰り返し共有された。そのため、「研修を増やす」だけでなく、

- ・業務整理
- ・ICT 活用
- ・会議体制
- ・働き方改善

なども含めて、総合的に考える必要性が確認された。また、本事業を通して、「実際に他園を見ること」そのものが、非常に大きな学びになることが確認された。今後は、主任層だけでなく、担任層や若手職員にも参加を広げていくことが期待される。

5. 保育士の働き方と保育の質

本年度の巡回を通して、各園から繰り返し共有されたテーマが、「保育士の働き方」であった。

- ・人員不足
- ・持ち帰り業務
- ・休憩確保
- ・行事負担
- ・研修負担

などについて、現場の厳しさが率直に語られた。また、「保育士に心の余裕があることが、子どもへの良い関わりにつながる」との意見は、多くの園で共通していた。

これは、保育の質を考える際に、

- ・保育内容
- ・子どもの姿
- だけでなく、
- ・職員配置
- ・労働環境
- ・人間関係
- ・業務量

なども含めて考える必要があることを示している。本事業では、「良い保育を求めること」と、「保育士が持続可能に働けること」を切り離して考えることはできないという認識が共有された。

6. 成果物よりも関係形成を重視する意義

本事業では、当初から、「成果物をつくること」自体を目的化しないことが確認されていた。むしろ重要視されたのは、

- ・他園を知ること
- ・話し合えること
- ・相談できること
- ・違いを理解すること

であった。実際、巡回を重ねる中で、「他園へ相談しやすくなった」「顔が見える関係になった」との声が多く共有された。また、「園ごとの違いを理解できたことで、比較ではなく尊重して見られるようになった」との意見も出された。

本事業は、「町全体で子どもを育てる」という視点を共有していくための関係形成の場として、大きな意味を持っていた。

7. 次年度以降への期待

各園からは、「今後も継続してほしい」との意見が多く出された。

- ・発達支援
- ・保護者対応
- ・働き方
- ・若手育成
- ・園内研修

などについては、今後も継続的な情報共有が必要であるとの認識が共有された。

- ・担任層への参加拡大
- ・テーマ別研修
- ・公開保育
- ・園間交流

などへの期待も示された。

一方で、「現場負担とのバランス」も重要であるとの意見が出されており、

- ・参加方法
- ・時間設定
- ・実施方法

などについては、今後さらに検討していく必要がある。本事業は、単年度で完結する取組ではなく、「川越町全体の保育・幼児教育を支えるネットワーク形成」として継続していくことが期待される。



第13章 今後の方向性

1. 園間公開保育の継続

本年度の巡回指導を通して、各園から最も多く共有された意見の一つが、「実際に他園を見ることの重要性」であった。

参加者からは、

- ・他園の空気感を知ることができた
- ・子どもの姿を直接見ることができた
- ・保育者同士の関わりが参考になった
- ・自園を振り返る契機になった

との声が多く共有された。そのため、今後も、

- ・公開保育
- ・園見学
- ・相互参観

などを継続し、「実際の保育を見ながら学ぶ」機会を維持していくことが重要である。また、単なる視察型ではなく、

- ・意見交換
- ・振り返り
- ・保育観の共有

をセットで行うことが、より深い学びにつながると考えられる。

2. 担任層・現場職員への参加拡大

本年度は、主任層や管理職層の参加が中心となったが、各園からは、「実際に保育を行っている担任にも参加機会があると良い」との意見が多く共有された。

- ・若手職員
- ・中堅職員
- ・クラス担任

などが他園を見ることによって、

- ・保育観
- ・子どもの見方
- ・環境構成
- ・保護者対応

などについて、新たな視点を得られる可能性がある。一方で、「誰かが参加すると現場負担が増える」という課題も共有されているため、

- ・参加人数
- ・時間設定
- ・代替配置

などについては、無理のない運営方法を検討する必要がある。

3. テーマ設定型研修の実施

本年度の巡回を通して、各園で共通して共有された課題として、

- ・発達支援
- ・保護者対応
- ・若手育成
- ・働き方
- ・ICT 活用
- ・安全管理

などが挙げられた。今後は、公開保育だけでなく、「テーマを絞った研修」を行うことも有効であると考えられる。

例えば、

- ・発達支援と保護者説明
- ・異年齢保育
- ・子どもの主体性
- ・保育士の働き方
- ・園内研修の進め方
- ・ICT 活用

などについて、事例共有や小規模な意見交換を行うことで、より実践的な学びにつながる可能性がある。また、「成功事例だけを共有する」のではなく、「悩みや困り感も共有できる場」とすることが重要である。

4. 発達支援・保護者支援の共有

本年度の巡回では、発達支援や保護者対応について、多くの園から課題が共有された。

特に、

- ・発達障害児傾向
- ・加配児対応
- ・保護者への伝え方
- ・保護者理解
- ・支援機関との連携

などについては、園単独で抱え込むことが難しい現状が確認された。

今後は、

- ・巡回相談
- ・保健師
- ・心理職
- ・専門機関

などとの連携を含め、「町全体で支える視点」を強化していく必要がある。また、「どのように保護者へ伝えるか」についても、各園で共有し合うことが重要である。

5. 働き方改善と業務の見直し

本年度の巡回では、「保育士の働き方」が大きなテーマとなった。

各園からは、

- ・持ち帰り業務
- ・行事負担
- ・会議負担
- ・休憩確保
- ・人員不足

などについて、率直な意見が出された。また、「保育士に心の余裕があることが、子どもへの良い関わりにつながる」との認識が共有された。そのため、今後は、

- ・業務整理
- ・ICT 活用
- ・会議見直し
- ・行事精選

などについても、継続的に検討していく必要がある。また、「新しいことを増やす」だけでなく、「何を減らすか」を考える視点も重要である。

6. 認定こども園化に向けた支援

川越町では、今後、認定こども園化などを含めた保育・幼児教育体制の変化が想定されている。

そのため、

- ・幼稚園
- ・保育所
- ・認定こども園
- ・小規模保育

それぞれの役割や強みを理解しながら、相互に学び合うことが重要となる。特に、

- ・長時間保育
- ・未満児保育
- ・教育課程
- ・養護的関わり

などについては、今後さらに共有や検討が必要になると考えられる。また、「違いをなくす」のではなく、「違いを理解したうえで連携する」視点が重要であることも確認された。

7. 川越町保育・幼児教育モデルの構築

本事業を通して、「町全体で子どもを育てる」という意識が少しずつ共有され始めた。

各園は、

- ・設置主体
- ・園文化
- ・人員体制
- ・保育理念

などが異なっている。しかし、本年度の巡回を通して、「違いを知りながら学び合う」関係が形成され始めたことは、大きな成果であった。今後は、

- ・公開保育
- ・相互参観
- ・テーマ別研修
- ・園間交流

などを継続しながら、「川越町全体として保育・幼児教育を支えるネットワーク」をさらに発展させていくことが期待される。また、本事業は、「成果物を作ること」のみを目的とするのではなく、「相談できる関係をつくること」に大きな意味があった。今後も、

- ・保育士同士
- ・園同士
- ・行政(他部署連携含む)
- ・関係機関

がつつがりながら、「同じ川越町の子どもを育てる」視点を共有していくことが重要である。



資料編

●資料1 本事業の実施要項

「川越町小規模保育事業者等巡回指導事業」

1 事業の名称

川越町小規模保育事業者等巡回指導事業

2 事業の目的

本事業は、川越町が認可を行う町内の小規模保育事業者等に巡回アドバイザーを派遣して、助言・指導などを行うことにより、保育の質の向上を図るものである。また、巡回アドバイザーの指導時に、町内の公立及び私立の保育士、幼稚園教諭を同行させ、同行指導を行うことにより、保育士などのスキルアップ及び指導力向上を図ることで町全体の保育の質の向上を図るものである。

3 支援対象

巡回指導：川越町内の小規模保育事業者等

同行指導：町内の認可保育所など、幼稚園、認定こども園に施設に勤務する保育士、幼稚園教諭のうち、当町が指名する者

4 業務内容

(1)小規模保育事業者などへの巡回指導

- ①小規模保育事業者などの業務全般に関する助言又は指導
- ②保護者への対応における個別の事例ごとの助言又は指導
- ③障害のある子どもや特に配慮を必要とする子どもの支援に関する助言又は指導
- ④その他、町が必要と認めるもの

(2)当町が指名する者への同行指導

- ①巡回指導時において同行する者に対して、指導方法に関する助言又は指導(事前指導含む)
- ②①に関する振り返り
- ③①～②に関する町への情報提供
- ④その他、町が必要と認めるもの

5 事業の必要性

小規模保育事業者は三重県が認可する認可保育所とは異なり町が認可事務を行うことになり、一定の保育の品質を担保する責任が町に生じる。

また、川越幼稚園が認定こども園化することで、必要な保育士数が増加し、新たに保育士を雇用する必要が生じることから、指導力の向上が必要となる。特に公立保育所は近年0歳児を受け入れていないが、0歳児は乳幼児突然死症候群のリスクも高く、保育士一人一人の保育力が必要であることから、指導力の向上が必要である。

本事業の最終的な目標(数年間の期間は必要)は、町内施設間での相互研修の実施や、園長・保育士などへの指導者の養成である。指導者を養成することで園内のOJTの体制を向上させ、職員の定着を図ることを目指している。

●資料 2 参加者名簿

令和 7 年度川越町小規模保育事業者等巡回指導事業には、以下の関係者が参加した。なお、各園の担当者については個人情報保護の観点や業務上の配慮により、参加者の実名は伏せて園名のみを掲載させていただいた。

- ・巡回指導コーディネーター：田村 禎章（東海学院大学 健康福祉学部 総合福祉学科）
- ・巡回指導コーディネーター：杉浦 公紀（杉浦社会福祉士事務所）
- ・北部保育所
- ・中部保育所
- ・南部保育所
- ・川越幼稚園
- ・ひばりこども園
- ・もりのくに褒育園川越
- ・川越町子ども家庭課

●資料3 実施日程一覧

回	日時	巡回先	主な内容
第 1 回	2025 年 8 月 25 日	もりのくに褒育園川越	小規模保育、褒め育、手ぶら保育、保護者支援
第 2 回	2025 年 11 月 25 日	川越幼稚園	自ら選ぶ遊び、園内研修、認定こども園化
第 3 回	2025 年 12 月 22 日	ひばりこども園	異年齢活動、発達支援、ICT 活用
第 4 回	2026 年 1 月 28 日	南部保育所	異年齢交流、絵本実践、若手育成
第 5 回	2026 年 2 月 16 日	北部保育所	劇活動、保護者対応、職員連携
第 6 回	2026 年 3 月 17 日	中部保育所・役場	安全管理、外国ルーツ家庭対応、総括

●資料4 各園の本事業の振り返り

各園から提出された振り返りでは、他園の実践を実際に見ることで、自園の保育を見直す機会となったこと、同じ川越町の子どもを育てる仲間として連携していきたいこと、保育士の働き方や負担軽減の必要性が共有された。

※本文第 11 章に、各園の振り返り内容を整理して掲載した(執筆内容に一部加工を加えている)。

※振り返りを執筆いただいた各園に感謝する。

あしがき

本年度の川越町小規模保育事業者等巡回指導事業は、町内の保育所、幼稚園、認定こども園及び小規模保育事業所を対象として、各園の実践を相互に巡回・見学し、意見交換を重ねることにより、保育・幼児教育の質の向上と職員の資質向上を図ることを目的として実施された。加えて、本事業は、外部アドバイザーによる助言にとどまらず、参加園の主任層を中心に、互いの実践に学び合う関係を築きながら、町全体としての保育・幼児教育の充実につなげていくことを志向した点に大きな意義があったと考える。

本年度は、事前の打合せ及び会議を経て、各園への巡回指導が実施された。巡回では、園舎や保育環境を見学し、当日の保育の状況や日頃の工夫について説明を受けた後、参加者同士で率直に意見交換を行う流れが積み重ねられた。参加者の振り返りからは、他園での子どもの姿や保育者としての関わり、環境構成、実務における動線などを自分の目で確かめることにより、話を聞くだけでは得られにくい学びや気づきを得られたことが確認された。巡回を通して、他園における実践を具体的に共有する機会が生まれたことは、本事業の確かな成果の一つである。

異年齢の関わりを自然な形で取り入れている園、劇や絵本、遊びを通して子どもの主体性を支えている園、子どもが安心して過ごせる居場所づくりを大切にしている園など、その実践の表れ方は多様であった。他方、その違いは優劣として受け止められたのではなく、それぞれの園が置かれた条件のもとで何を大切にしているのかを知る契機となり、参加者が自園の実践を見つめ直す視点にもつながっていた。自園のやり方のみにとらわれず、他園の実践から柔軟に学ぶことができたという感想は、この点を端的に示している。

巡回及び意見交換を重ねるなかで、保育・幼児教育の質を考える際には、個々の実践内容そのものだけではなく、それを支える職員間の連携、若手職員の育成、情報共有、園内研修の在り方が重要であることも改めて共有された。各園からは、子どもの姿を職員全体で共有する工夫、ベテラン職員の立ち居振る舞いを日常の中で若手が学ぶ仕組み、一方的に教えるのではなく共に考える関わり、複数の職員で子どもを支える体制づくりなど、多くの実践が示された。こうした取組は、子どもの育ちを一人の担任だけで抱え込まず、園全体で支えていく保育・幼児教育につながるものであり、結果として職員の育成や定着にも資する視点であるといえる。

本年度の巡回では、保護者対応、発達支援、加配児対応、情報伝達、安全管理、ICT 活用、休憩確保、施設の広さや動線など、日々の保育・幼児教育の実践を支える基盤に関わる課題も繰り返し共有された。参加者の振り返りにおいても、保育士が置かれている環境を丁寧に見つめることの重要性が示された。保育・幼児教育の質の向上は、新たな取組を加えることだけで実現するものではなく、職員が安心して働き、子どもに丁寧に向き合うことのできる環境をどのように整えていくかという視点と併せて考える必要がある。その意味で、本事業が、保育内容の検討に加え、業務の進め方や組織内外の連携の必要性を可視化する場となったことは、今後の取組を検討するうえでも重要である。

参加者からは、他園の実践や環境の違いを知ることによって、自園の保育・幼児教育を相対化して捉え直すことができたとの声が複数寄せられた。限られた環境の中での工夫、子どものことを考えた動線、保育者の言葉かけや関わり方、年齢や発達段階に応じた対応の在り方など、日常の保育・幼児教育に直結する学びが多くあったことは、本事業が現場感覚に根ざした研修として機能していたことを示している。また、巡回の機会を主任層に限らず、担任などの現場職員にも広げることができれば、学びがさらに園内へ波及するのではないかという意見もみられた。こうした意見は、次年度以降の運営方法を検討するうえでの参考となるものである。

成果の在り方については、固定的な資料を作成すること自体を目的化するのではなく、変化する保育現場の実情に即して、実践知を継続的に共有できる仕組みを重視すべきであるとの視点も示された。保護者支援、保育士の働き方、制度改正や園の体制変化など、現場を取り巻く状況は常に変化している。そのため、町内の園同士が継続してつながり、互いに相談し合いながら実践を積み重ねていくことが重要である。

以上のことから、本年度の川越町小規模保育事業者等巡回指導事業は、各園の実践の共有と相互理解を進めるとともに、町全体の保育・幼児教育の質を支える視点を広げ、次年度以降の継続的な取組につながる基盤を形成した事業であったと整理できる。本年度は、直ちに統一的な成果物を完成させる段階というよりも、各園が互いの実践に学び、共通する課題と大切にしたい視点を言語化し始めた段階であったといえる。特に、町内の園同士が相互に訪問し、率直に語り合う経験を重ねたことで、園の違いを越えて学び合える関係性が醸成されたことの意義は大きい。今後は、本年度に得られた学びと関係性を活かしつつ、園ごとの実情を尊重しながら、共通して取り組むことのできるテーマを丁寧に整理し、実践と振り返りを往還させる取組へと発展していくことが期待される。



令和8年3月31日

令和7年度川越町小規模保育事業者等巡回指導事業 参加者一同

令和7年度 川越町小規模保育事業者等巡回指導事業 報告書

●監修・執筆者

- ・巡回指導コーディネーター：田村 禎章（東海学院大学 健康福祉学部 総合福祉学科）
- ・巡回指導コーディネーター：杉浦 公紀（杉浦社会福祉士事務所）

●協力機関(順不同)

- ・北部保育所
- ・中部保育所
- ・南部保育所
- ・川越幼稚園
- ・ひばりこども園
- ・もりのくに褒育園川越

●注意事項

- ・本報告書は、令和7年度川越町小規模保育事業者など巡回指導事業における巡回記録、意見交換、各園の振り返りなどをもとに作成したものです。本報告書に掲載した内容は、各巡回時点における実践・意見・記録を整理したものであり、各園の今後の実践や運営方針を固定的に示すものではありません。
- ・本書は印刷製本をしたものではなく、デジタル版での報告書となります。必要に応じて、下記ホームページよりダウンロードしてください。
- ・本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。

●発行日：令和8年6月30日

●発行者：川越町子ども家庭課

〒510-8588 三重郡川越町大字豊田一色 280 番地
電話 059-366-7130 FAX 059-365-5380
mail k-kodomo@town.kawagoe.mie.jp
HP <https://www.town.kawagoe.mie.jp>



※表紙・中面の挿絵等は、生成 AI を活用して作成したオリジナルイラストである。本報告書の趣旨に合わせ、「地域の中で子どもたちが育ち合う姿」及び「川越町全体で子どもを育てるイメージ」をもとに制作した。